

## 二本松 column

### 城下町と祝祭空間（1） 城下町の基盤を活かした二本松提灯祭りの見せ場

#### ■二本松提灯祭りの概要

二本松市の旧城下町の範囲である7つの町（本町、亀谷、松岡、若宮、竹田、根崎、郭内）では、毎年10月4～6日に日本三大提灯祭りのひとつである二本松提灯祭り（二本松神社例大祭）が行われている。祭りの起源は、城下町時代の1643年にさかのぼることができ、約370年以上続く伝統的祭礼行事である（福島県重要無形民俗文化財）。7町が豪華な山車（地元では「太鼓台」と呼ぶ）を所有しており、特に夜間に、一つの太鼓台に約300個以上の本物の火を灯す提灯をつけ、太鼓台ごと、場所ごとに異なるお囃子とともに、列を成して巡行する姿が多くのお客を惹きつける。

#### ■都市の祝祭空間

さて、御輿や太鼓台がまちを巡る日本の祭りには、その都市の歴史や空間的特徴を生かした「巡りの場」や「見せ場」といった祝祭空間を定義することができる。「巡りの場」とは、太鼓台の巡行ルートだけではなく、巡行によって顕在化する城下町の基盤や地域のまとまりである。二本松提灯祭りの太鼓台が巡行するルートでは、神社はもちろんのこと、城下町時代の旧街道を中心に、駅や商店街など現代のまちの主要な地点を通過する（図1）。途中、観音丘陵を越えるために重い太鼓台を曳いて坂を上り下りする様子を見ると、城下町の設計に生かされたまちの地形を意識することが

できし、各家に飾られた町の紋がついた提灯や、自分の町の太鼓台が通過するときの沿道の盛り上がりを見ると、各町のまとまりが顕在化するのを感じる。

「見せ場」は、御輿や太鼓台の特別なパフォーマンスと、その舞台や背景となる特徴的な都市空間、そして、それを眺める観客が集う歩道などの鑑賞空間とで構成されていると見ると、まちの公共空間が違って見えてくる。二本松提灯祭りでは、駅前広場や、交差点、坂道などの都市の特徴的な空間に応じた太鼓台のパフォーマンス（勢揃い、転回、駆け上がり等）が行われ、その周囲には見物客が取り巻く鑑賞の場が生まれている（図2）。

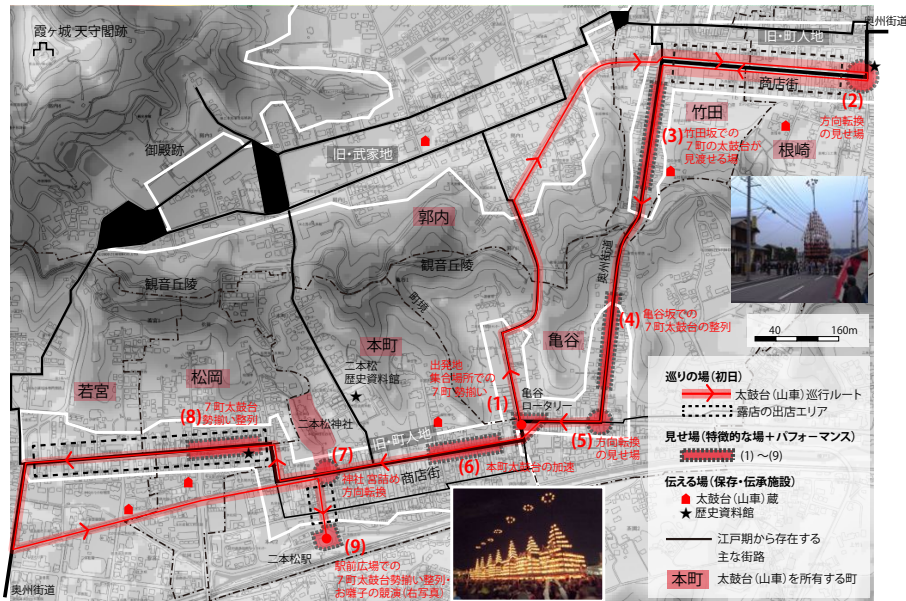


図1 二本松の提灯祭り（二本松神社例大祭）の「巡りの場」「見せ場」と、町の主要な場所、街路との関係

■参考文献：「季刊まちづくり36号 特集1『都市の祝祭空間』  
都市祝祭空間研究会 川原晋、岡村祐、松浦健治郎、永瀬節治

#### ■祭りを意識した都市空間整備

二本松では、2000年以降、こうした「巡りの場」や「見せ場」を意識した都市空間の整備が少しずつ行われてきた。

前述の、竹根通りの街路事業のためのワークショップ（2003年～）では提灯祭りの舞台を形成することが話し合われ、整備が進められている。また、坂道上で整理するので、すべての太鼓台を見渡すことのできる「見せ場」である亀谷坂では、路面埋め込み陶板による太鼓台の停止位置の明示や、夜祭りの利便性に配慮した街灯の集中管理、一般より細い電柱の設置、交通標識の裏面に見せ場空間であることを示した可動式サインの設置が行われた（2006年整備）（図2右上）。

また、初日の合同曳き廻しの出発地点としての見せ場であり、城下町時代の桁形の道路形状を残す亀谷ロータリーでは、2005年に交通安全性の向上を理由に、交差点中央を占めていた噴水の撤去、歩車道段差の解消、老朽化した歩道橋の撤去が行われたため、祭り時には太鼓台が勢揃いするのを多くの観客が見ることが出来る、広がりある空間が創出された（図3）。

さらに、初日の巡行ルート終点としての見せ場である駅前広場では、駅前空間の美化や交通機能強化を意図とした駅前広場整備が行われ、広場中央のモニュメントの撤去や歩車道段差の解消等が実現した。その結果、太鼓台の勢揃いの最後の見せ場として、太鼓台の曳き手と観客の一体性を高める空間が生み出された（2009年整備）（図1下の写真）。

その他、主要な道路では、道路を横断する電線が撤去されており、太鼓台の巡行を円滑にしている（図1右上の写真）。

このような、祭りが手がかかりにした都市空間の整備は、歴史まちづくり法（2008年制定）の理念に示されたような、城下町都市が有する地域固有の歴史や伝統を反映した人々の活動に着目した都市空間の保全・整備・活用の好例と言える。そして、市民が都市空間に愛着や誇りを持つことにつながっているに違いない。

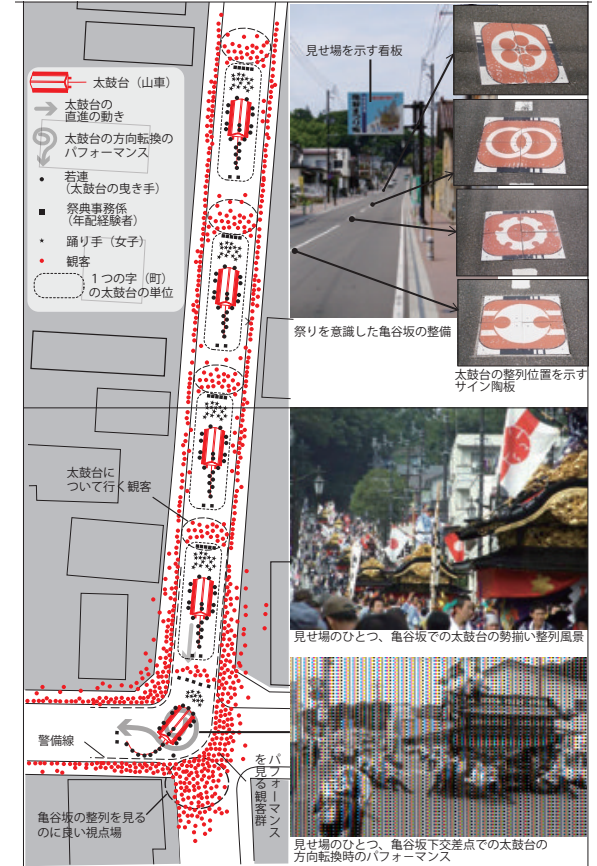


図2 亀谷坂付近の祭りの「見せ場」と、祭りを意識した空間整備例

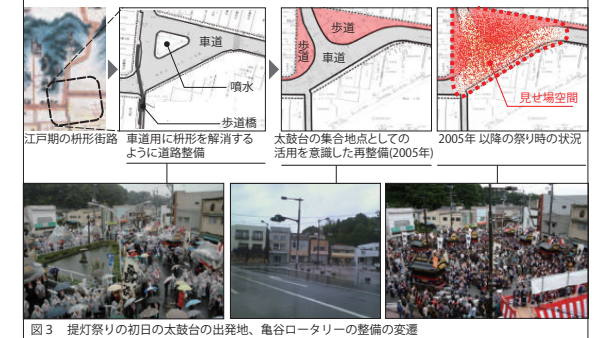


図3 提灯祭りの初日の太鼓台の出発地、亀谷ロータリーの整備の変遷